
難病の 訪問カウンセリング（４）

難病の訪問カウンセリングの特徴を見る時に、私が考えている1つのポイントは、病気を抱えながら何をしたいか、何ができるかを一緒に考えることだと前の回の最後に書いた。今回はそのことから見てみようと思う。「何をしたいか」、それは「これからのことを考える」ことと言えるだろう。これは、あることに対して不安や恐れを持ったり、苦痛を感じたりして社会生活において不自由を生じる神経症などに対する心理療法とは、少し重点の置き方が違っているようにも見える。この不安や社会生活あるいは対人関係等における不自由さについて考える時には、簡単に言えば今までの生活の中で、その不安等を引き起こす元

藤 信子

となったが意識の上では埋もれていることを思い出し、その問題の歴史に自ら納得する過程と言えるだろう。

一方、ハートの訪問で私が行っていることは、現在の療養生活についての心配、悩みなどを聞き、患者本人や家族のソーシャル・サポートについて考え、その利用も勧めることもする。Aさんは、70代の男性だったが、訪問の前の保健の説明では、本人と配偶者・子どもたちとの間で、呼吸器をつけることに対する意見が分かれ、本人の意思に反して、呼吸器装着になり患者も家族も落ち込んでいるということだった。患者本人は「こんなつもりじゃなかった、妻や娘になんでもしてもらうことになってしまった」と、手術したことを悔やまれる。前に書いたように、ALSの場合進行が早く、呼吸の麻痺が生じることが予想されるので、医療従事者はそのような場合に呼吸器を装着するかどうか、本人と家族の意思決定が出来ているかどうかを時々聞くことになる。呼吸器装着に関しては、判断が揺れることがあるし、意思の確認ができないと、病院に入院すると呼吸器を着けることになるからである。こんなはずじゃなかったという話があり、この患者・家族はそういうケースだった。以前されていた仕事のことから始めて、趣味について聞いてみた。するとこの人は趣味の友人が多くいて、今もお見舞いに見え、その時は本人が良く話すという妻の話で

ある。車の運転も好きでいろんなところに行ったことも話されるが、自分はアウトドア派なので、身体が動けなくなると意味がないと言われる。しかし妻は友達が自分が運転するから一緒に出かけようと誘ってくれる、と話される。そこから車いすを自分用にすること、車いすで乗れる福祉のレンタカーがあることなど、保健師が話すとお出の話をしてみるが、やはり「動けないのに生きているのは自分にとっては意味がない」と言われる。しかし外出の話をする時の妻の生き生きした様子を見て、介護をしている奥さんはAさんが外出されたり、楽しまれるのがうれしいと思います、と話した。介護をするのは大変だけれど、本人が家族に笑顔を見せることが出来るのは、ケアする人にとって嬉しいことにつながるということを伝え、落ち込んでいる本人に家族との生活に目を向けることを考えてもらいたいと思った。

Bさんは、ALSの診断を受けてから呼吸器は着けないと決められたが、身体が次第に動きにくくなっていくことなどを考えると「死にたい」と繰り返しておられるということだった。仕事のことなど聞いているうちに、この頃はなかなか行けない故郷のことを話だし、そこで過ごした子ども時代の風景や遊びなどを、懐かしく楽しそうに話す様子は、「死にたい」と言われている時の様子とは全くちがっていた。楽しみは遠く離れている孫に電話を

する時だというのを聞いて、Bさんが子供のころ故郷でどんなふうに住んだか、懐かしい景色など伝えたいことを録音して、そのお孫さんに残しませんか？と提案してみた。話の中に孫に伝える大事な風景というような響きを感じたからである。この提案は気に入られて、そうしましょう楽しみです、と賛成が得られた。

Aさんは、身体が動かないことで生きる意味がないと思っていたことから、友人や家族の思いを考える方向に少し目を向けるような話になった。Bさんは可愛い孫に自分の故郷のことなどを伝えるという役割を見出したと言えるだろう。自分の外に目を向けることで新しいことを考えるようになったようである。

難病のカウンセリングが「これからのことを考える」というのは、身体が自由な状態がいつまでも続くものではないこと、そして命が終わる時のことを考えることにつながることだろう。もちろんこの二人のように、周りを見渡して、友人や家族のことを考えられるという余裕が生まれない場合は多い。むしろ、本人・家族ともに、病気に対する理解が乏しく、病気であることを認めるには抵抗がある

らしいという場合も多い。そのような場合は、今の不自由さ、困ることは何か、それに対して、どんなサポートを考えられるか、道具的なサポート面を重点的に話すことも多い。そして患者本人を支えるために、介護する家族のサポートには何が必要かを相談することも大事なことだと考えている。それについても、今の状態から次のことつまり「これからのこと」を考えていると言える。

よく考えてみると、統合失調症の人の面接をしていた時は、なぜ今のような状態になったかについて、一緒に考えたわけではない。長く話し合っているうちに症状と自分の特徴に気付くということはあっても、私はそこを最初に面接のポイントにしたわけではなかった。毎日の生活の中で、どうしようかというようなことを一緒に考えてきたと思う。高次脳機能障害の人との面接も似ている。これは問題の元を探して理解し納得するという方法ではなく、できるところから「これから」のことを考えていくということである。ただし、そのためには今までの生活を聞くことは大切になってくる。その人らしさを探すことで「これからのこと」を考えるヒントが見つかることが多いと思うからである。